

川瀬亜衣 ソロダンス
『透明な綾』

観劇録

二〇二五

二〇二五年 七月吉日 発行

二〇二五年二月、京都・紫野にて上演しました、川瀬亜衣ソロダンス『透明な綾』から早幾月、ここに、上演の記録を封入いたします。

上念省三さま、観劇録にと短歌を結んでくださいましたこと、心から感謝申し上げます。そして、詩集制作から公演、そして今日この日を迎えるにあたり、お世話になった皆様へ、こちらの観劇録をお手にとってくださったあなたさまに、お礼申し上げます。

透明な綾 二十五首

寄稿

上念省三

夙川七首

某日夙川畔香櫨園で川瀬亜衣を見る

光が熱さになるなら動きは何になるのか

光だろうよ不在だろうよ

さっきまでそこに在ったからだが今はなく

動くとは不在が生まれることだった

動くとはそこからいなくなることだと

今日まで気づきもしなかったんだが

生きるとは不断に不在を生むことだ

不在のあわいにわたくしは在る

動くとは普段に存在を捨てることだ

喪失を前にからだが怯える

光がまっすぐ差し込んでくるほどに

からだはからだを差し込めるのか

まなざしという差し込みに遅れて腕がのびていく

揺れる直線

紫野十四首

妻の忌日に紫野へ川瀬亜衣を見に行く

開演前三首

とても早く着いてしまう

そのことに意味があるのかあえて考えずに措く

妻の忌日にほかのおんなのからだをみる

この人は今は生きている

曇日の光とは差し込むのではなく存在している

そこでからだはとう在るのだろう

終演後十一首

何か話している　言葉は意味であるよりも
感觸であり湿り気であるから入ってきた

動けばシャツがよじれ皺寄る

生きているわけではないが形を変える

鎖骨の下の皮膚が盛り上がって見えた

どのような力でそのようなになるのか

ゆげが立ちからださが沈み心がしずまってゆく

光が柔らかかに遍いている

小さな足の指の爪から目が離れない

裸足だったことに今気づく

走る速さと方向に置いてけぼりになる

退く目から倍速になる

からだの遅速についていけない

感情ともこころとも呼べない置き去りがあって

この柔らかい時間に隙間が見つけられない

あえて生硬な言葉を並べたくなる

壁で布が揺れている 生きているのではない

思いが沿うと一緒に揺れる

少しずつ大きさを変えていた息にいつか

合わせて息をする　胸がゆるんでまたふくれて＊

ラインから逸れて綱渡りのように歩いている　と
外でサイレンが鳴っている

歸宅一首

生きている人を見ながら生きていない人を思っていた

揺れているからだだが揺れていた

五十日過ぎ春盛んなり三首

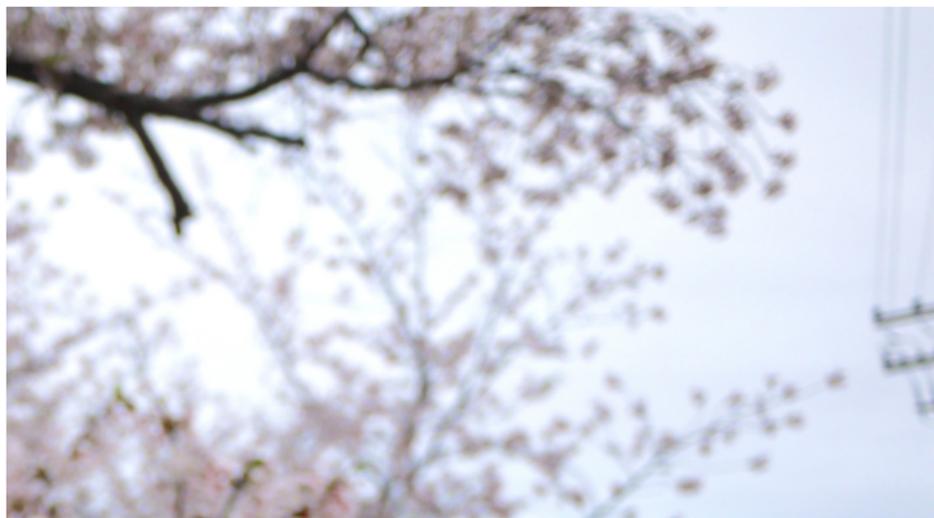
点描の動きは女の体から

育っているのか去っていったか

五十日過ぎ水仙も梅も過ぎ

からだはとうに残像であつた

添えられた音は角度を支えながら
遠くに開き鼓動を残した



ソロダンス『透明な綾』は、京都・紫野、西宮・香櫨園の稽古場で創作してきました。香櫨園では、夙川オアシスロードを歩いて稽古場へ通う道中、土地馴染みのあるダンス・中根千枝さんに、その場所やそこから見えるものについてのさまざまをお話いただきました。

時が合わず、稽古期間中に訪れることができなかった香櫨園浜や桜満開の夙川オアシスロードを歩いたのは、終演後二ヶ月以上たってから。やはり千枝さんに同行してもらいながら、とことこ歩き、つぎに『透明な綾』を踊るのはいつ、これからどこへ赴こうかと、暮れゆく香櫨園浜の水面の色をともし眺めました。

夙川オアシスロード 香櫨園浜

二〇二五年 四月十二日

撮影 川瀬亜衣



2025年2月、ソロダンス「透明な綾」を上演しました。
この公演では、踊り手が執筆した『詩集 透明な綾』をモチーフにした二つのソロダンスを踊りました。一つは、踊り手自身による作、もう一つは、別に振付家を迎えた作。

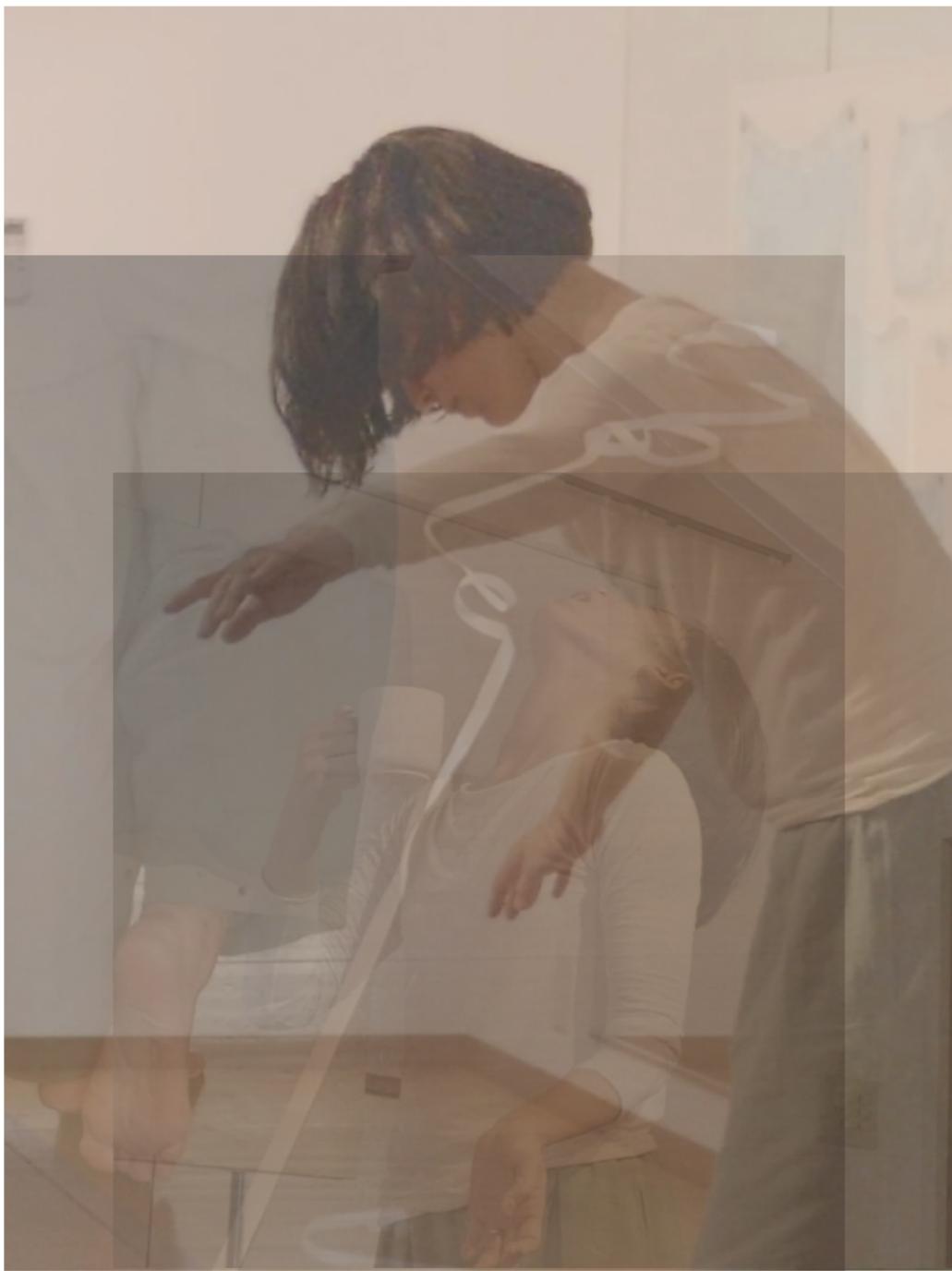
大谷悠さんへ「『詩集 透明な綾』をモチーフにした川瀬亜衣のソロダンスを振付けてもらえませんか」とご依頼したのは2023年の秋のこと。夏の終わりから稽古がはじまり、冬を越して…2月にしてはあたたかな日に上演の日を迎えました。

solo_aには、悠さんの音響操作により突如やってくる無音源状態に応じて、多様なバージョンが存在するムーブメントを即興的に繰り出すミッションが存在します。思い及ばぬみちゆきに、波乗り、身を委ね、ときに仕掛けることは生活の常でしょうか。きつと踊るその人やその時々によって、様々な泳法が現れる妙味の作。ありがとうございました。

紫野・Space bubu 『透明な綾』solo_a

二〇二五年 二月一日

撮影 中根千枝



『solo_a』は、踊り手自身による作。『solo_b』と同じく、『詩集 透明な綾』をモチーフにしています。詩集と関わる中で発露した言葉や動き。それらを拾い上げて作ったいくつかの〈仕事〉を行いながら、その日の体と場を受けて生まれる即興性を歓迎して踊りました。

稽古場には、協力者の中根千枝さんや、観劇録をご寄稿いただいた上念省三さんにお越しいただいています。そうして一人ではない稽古場で解れゆく時間と、人知れず黙々と踊る時間を往復しながら、創作は進みました。

本番時には、当日朝の詩作を上演中に口にしていきます。初日には初日の、2日目には初日のものに加えて2日目の言葉が重なりました。いつかまた上演するその日までに生まれるだろう言葉や踊りを、さらに丁寧にもっと広く深くと伸縮しながら、織り重ねていけたらと思います。

紫野・Space pubu 『透明な綾』 solo_a

二〇二五年 二月三日

記録映像の静止画よりコラージュ



学生時代の友人である鈴木彩加さんに、『詩集 透明な綾』に寄せて「美術作品を制作してもらいませんか？」とご依頼したのはもうずいぶん前のこと。詩集に掲載させていただいたその二作を、ソロダンス『透明な綾』の公演会場にて展示させていただき、ダンスとともにご覧いただきました。

彩加さんからのご提案でそれぞれの自宅で種から藍を育てるところから創作をはじめ、藍染めの作品を二つ、創作してくださいました。じつは、水辺で作品を見たいという念願はまだ叶っていません。いつか、水辺に揺れる二つの作品と踊ることができればと願っています。

上段 … 紫野・Space bubu 二〇二五年

写真右から 鈴木彩加 二〇二三年制作

『いつでもそばに』
『記憶のコラージュ』

下段 … 右茨木・左須磨 二〇二三年

撮影 鈴木彩加



透明な綾 本番詩 書き起こし

詩 背中す春

朝 カーテンをあける

自転車の後輪の影がのびている

外へ出て あれは マンションの影

大家さん家の影 これは工事現場の影

あ、これは、窓ガラスに反射した光の影

左目にまつげがはいっていたい

傷がつく前に血液は姿を変えて仕事する

朝 今朝 アスファルトが濡れている

そして乾いた 指の間を風が

スイングする スイングする

スイングする スイングする

それはわかる

あるとき さつき ちょっとまえ

知らんくらいずっとまえ 動かされて

形を変えた 電線が よじれたり

まがったり うねうねと 電柱を

のぼる それを辿って上を見る（曇り）

川瀬亜衣 ソロダンス『透明な綾』

日時 2025年2月

2日(日) 11:30 / 16:00

3日(日) 11:30 / 15:00 / 19:00

会場 Space bubu (京都市北区紫野上御所田町41-1)

[solo_a]

構成と出演：川瀬亜衣 詩：背中す春 協力：中根千枝

[solo_b]

振付と演出：大谷悠 出演：川瀬亜衣 協力：大石英史

美術作品協力：鈴木彩加

『いつでもそばに』『記憶のコラージュ』ともに2023年制作

音楽協力：Ichizo Yoshioka <https://big-up.style/elHiMZlyUA>

衣装協力：増田美佳 instagram @micacim

記録映像協力：奥田ケン

企画制作・主催：川瀬亜衣

お問い合わせ先：

メールから airly.twill@gmail.com

Webサイトから <https://aikws12.wixsite.com/solosailing>

動画サイトにて記録映像を公開しております。
こちらの二次元コードからアクセスしてご覧ください。

2025年2月3日 月曜日 15時の回



2025年2月3日 月曜日 19時の回



波がとがって
まるまり
ゆれている

胸がふくれて
しぼんで
またふくれる

皺がぬれて
なじんで
かわいていく

手のぬくみをたしかめて
ぬくみ　ただそれがある

この先の誰も

知る由もない事を約束する

それを守ることを契る口がある
ただそれがある

明日はずっと明日のまま
窓は開かれ風が吹く

『詩集 透明な綾』より

収録詩のなかで、もっとも最初
に書いた部分は、船上で踊りの
出番を待つ間に、神戸の海を眺
めながら書き記したものだ。

神戸港 二〇十七年

撮影 川瀬亜衣

